

防衛費のリアル(9) 国力研究②日米の比較

国力には、工業生産力、資源保有量、輸送(兵站)能力、そして、人口構成など多くの関連指標があります。ここでは、少し大雑把ですが、GDP(国内総生産)、つまり、国民が1年間に生み出す付加価値の合計を代表的指標に、人口を参考値として、歴史を振り返ってみたいと思います。

まず、幕末の1853年7月、ペリーの黒船が来航し、開国を迫られて江戸幕府が右往左往した頃の日米の国力比較です。当時、米国はカリフォルニアをメキシコから強奪し、太平洋への足掛かりを得て、欧州に負けじと、清への進出を企んでいました。そこで石炭、水の供給や、当時盛んだった捕鯨の中継基地として、日本の開国を迫り、つい2か月前には、琉球王国の那覇港も占拠していました。当時はまだ国際的な経済統計や為替システムがなかったため、誤差は不可避ですが、購買力平価(Maddison Database、基準:1990年国際\$レート)でのGDPは、700億\$ vs. 420億\$。驚くことに、日本は米国の1.7倍でした。また、人口でも、日本3000万人、米国2500万人と優位でした。にも拘らず、日本は、黒船の威容に圧倒され、不平等条約を結ばされることになりました。鎖国の日本が海外の事情に無知だったことが一因と思われます。

そして、それから90年、日本は文明開化と富国強兵で、急成長しましたが、米国はT型フォードに代表される自動車量産や石油産業などで日本を遥かに上回る経済成長を遂げました。その結果、1941年、日米開戦直前のGDPは、1700億\$:10兆



1853年 ペリー来航



1941年 日米開戦

日本	GDP	700億ドル	1700億ドル
	人口	3000万人	7300万人
米国	GDP	420億ドル	10兆7000億ドル
	人口	2500万人	1億3000万人

7000億\$。米国のGDPはなんと、日本の60倍以上、人口でも、日本7300万人に対し、米国は1億3000万人に達していました。前回、近衛首相肝煎りの総力戦研究所が開戦の非合理性を指摘したことを振り返りましたが、この数字を見れば、文字通り桁違いの国力差だったことが分かります。

それにも拘らず、なぜ、蛮勇にも似た開戦の道を選択しなければならなかったのでしょうか？ ABCD 包囲網の経済封鎖で仕方がない事情、国民の強い支持で既に東南アジアや南洋方面に陸軍が進軍していた既成事実、そして、大和魂で緒戦を乗り切れば、何とか有利に停戦交渉出来るという自分勝手な甘い見通しなどが開戦の理由として挙げられていますが、「失敗の本質」を深掘りするなら、日米開戦に先立つ10年間の日中戦争の泥沼にこそ遠因があったと推察されます。

そこで、今回は、1894年の日清戦争の直前、および、日中15年戦争の端緒となった1931年の満洲事変の頃の日中の国力を俯瞰してみたいと思います。

（竹の台 西元）